

戦後初期沖縄版国語教科書の研究 (1)

—ガリ版刷り教科書について—

吉田裕久

(平成13年9月28日受理)

Research of the initial Okinawa version language textbook of the postwar period (1)

— In the case of the textbook by mimeographing printing —

Hirohisa Yoshida

The original textbook was edited after World War II in Okinawa. It was a textbook by mimeographing printing. It was revised several times. However, since the textbook itself hardly remains today, it is very difficult to clarify the actual condition. I investigated as much as possible. Consequently, in this paper, the following thing was mainly clarified.

1. With new textbook, many teaching materials of the old textbook were recorded and selected succeedingly.
2. New teaching materials which covered Okinawa were also contained in new textbook.
3. New textbook was edited regardless of Japanese Monbusho.
4. Since the issue date is not entered in a new textbook, it is difficult to distinguish the first edition or a reprint.
5. There is also a page which the child replaced with the pencil in a new textbook.

はじめに

第二次世界大戦最大の激戦地となった沖縄、日本本土の前線基地として直接の戦場となり、軍も民も多くの戦死者を出した沖縄——その沖縄は、本土と違って、米軍（海軍・陸軍）による直接統治となった。日本本土から行政権が切り離され、本土との交渉が全く途絶える中で、政治・経済はもとより、一般の社会生活まで、米軍の指示・命令に従うことを余儀なくされたのである。教育もちろん、その例外ではなかった。

沖縄では、昭和20年8月15日の公式の戦争終結を迎える以前より、米軍から、学校の早期開校、そのための教科書の編纂が要求されていた。こうして、食べるに食物なく、着るに衣服なく、住むに家なしのどん底の状況の中で教科書編纂作業は行われることになったのである。そこで出来上がった教科書は、時局を反映して、活字印刷ではなく、鉄筆でガリ切りされたいわゆる「ガリ版刷り教科書」であった。同時期の本土における暫定教科書の編纂も困難を極めたが、この沖縄における「ガリ版刷り教科書」の編纂・発行は、それ

に輪をかけたさらに厳しい状況の中で行われたのである。編集者の一人である嘉味田宗栄は、この編纂作業を終えての帰り道、薪を拾い、野草を摘みながら家にたどり着いたと述べている。

沖縄の各自治体が編集する教育史誌などでは時に触れられることがあるものの、その実物はほとんど残存していないこの「ガリ版刷り教科書」を、一体、誰が、何を資料に、どのようなものとして作成したのか。——本稿は、この戦後初期における沖縄版「ガリ版刷り教科書」の背景・実態・特色などについて、今日わかり得る範囲で明らかにすることを目的としている。

なお紙幅の都合で、二回に分けて報告する。

一 沖縄版「ガリ版刷り教科書」の背景

1 敗戦直後の沖縄教育

まず、この「ガリ版刷り教科書」が登場する背景となった、当時の沖縄の社会・生活・教育状況を概観しておかねばならない。

敗戦直後の沖縄教育の様子を報告したものに、最も

早く開校した石川市城前初等学校のものがある。その開校が昭和20年5月7日とあるから、日本降伏の三カ月以上も前、沖縄の終戦(6月23日)から数えても、それに先立つ一カ月半も前のことであった。この校長であった山内繁茂が沖縄文教部長山城篤男に宛てて7月25日に提出した次のような「学校設立当時ノ状況報告」がある。

校舎ナク教科書、学用品モナク只燃ユルガ如キ教育愛ノミニテ、顔色青白ク弊衣蓬髪ノ栄養不良児ヲ如何ニ養護スベキカニ苦心セリ。⁽¹⁾

教育よりもまず生きること、何よりも栄養補給が優先する状況であった。中には「戦果」をあさる子どもたちがいたという。教科書編纂の中心となる仲宗根政善(後述)は、当時の子供たちの様子を次のように述べている。

石川の街頭をうろついている学童を見ると、スパスパ、たばこをすっているんですね。レーション(米軍の野戦食)の中に入っているやつをすっているんですね。人々の服装も男か女かほとんど見分けもつかない。アメリカさんの洋服をつけたり、つぎはぎのよれよれの服をまとって、夢遊病者のようにうろつきまわっている。はだしの者も多い。

いちばんショックだったのは、チリ捨場にたかっている学童の群れを見たときでした。(中略)「戦果」をあさっているんですね。みんなわれわれの国民学校の学童たちです。それを見たとき、これは放っておけないなあと思いました。名護へ行ってもそういう状態でした。あちらこちらに子供らの群がうろついています。

そういう状態だったもんですから、何とかして、みんなで早く教科書を作って教育を始めなけりゃいかんなあという気になったんです。⁽²⁾

こうした学校の早期開校、それに連動する教科書編纂の要求は、沖縄知識人にとってはむしろ沖縄の子供の教育のためであった。が、米軍の本音からすれば、それよりも軍務の円滑な遂行のために子どもたちを一カ所に集めておきたい(子ども払いするため)という現実的な要求がその背後にあったのである。

2 教科書編集所の設置

①教科書編集所・編集体制(スタッフ)

この沖縄版「ガリ版刷り教科書」の編集に中心的な働きをしたのが、仲宗根政善(1907-1995)であった。仲宗根は、戦前は「ひめゆり」の教師として、また戦後は琉球大学で沖縄方言研究の先駆として(『今帰仁方言辞典』で学士院賞・恩賜賞を受賞)、さらには平和運動の指導者として著名であった。

仲宗根は東京帝大卒業後、故郷の沖縄に帰り、名護

の沖縄県立第三中学校教諭を経て、沖縄県女子師範学校(いわゆる「ひめゆり」)兼沖縄県立第一中学校の教師をしていた戦争末期の昭和20年6月23日、喜屋武海岸で12名の生徒とともに捕虜になった。この時、仲宗根は、手榴弾の栓を抜いて自決しようとする女子生徒に対して、「しばらく待て。今センをぬくんではないぞ。」「死ぬんではないぞ!」と言って、結果的には多くの若者の生命を救った人道的教師であった。そして、米兵に捕らえられて収容所にいた仲宗根に、8月、教科書編集の話が持ち込まれたのである。

公的史料である『沖縄の戦後教育史』には、この間の経緯が、次のように述べられている。

一九四五(昭二〇)年の八月に入って米軍政本部のハンナ大尉(後の少佐)は、沖縄独自の教科書を編集すべく、安里延元県教学課長に指示して適任者の物色に当たった。そこで当時古知屋在住の山城篤男を大尉自ら訪問し、教科書編集のことを話して協力を要請し、石川に迎えた。次いで仲宗根政善、真玉橋朝英、喜久里真秀などにも呼びかけ、東恩納にあった軍政本部内において初めての会合を持つことができた。⁽³⁾

このうち、安里延は文部省で教科書編纂を担当していたことがあり、米軍の事前調査が行き渡っていたことが知れる。山城篤男はその安里延の岳父、こうして沖縄で教育を再興するためには格好の人材が集められたのである。

当初の教科書編集スタッフは、次のようであったという。⁽⁴⁾

国語—仲宗根政善(編集課長も兼務)、喜久里真秀、嘉味田宗英
ローマ字—天願貞俊
英語—安里源秀が田井良地区で講習会用テキストとして作ったものを利用
歴史—島袋全発、安里延、城間正雄
理科—比嘉徳太郎、園原咲也、多和田真淳
数学—山里政勝
挿絵—大城皓也、山元恵一
原紙切り—喜久里真秀
翻訳—真玉橋朝英(検閲を受けるための翻訳)
補助員—太田昌秀

なお、「米軍占領下の教育裏面史」の仲宗根談話では、他に宮城現助、護得久朝章の名も挙がっている。初め五、六名くらいであったものが次第に増えていったという。

②教科書編集指針

教科書を編集することになって、どんな指針が立て

られたのか。これも教科書編集に先だって考えられたのか、編集の過程で徐々に出来上がっていったのか、その詳細はわからないが、仲宗根によれば、次のような趣旨に基づいていたという。

いちばん最初に示されたのは、①日本的な教材は絶対にダメ、②軍国主義的教材もダメ、③超国家主義的な教材もダメ、基本原則はこの三つでした。②と③とは、本土でも同じですね。日本に関する教材はいっさい抹殺という①の方針が、沖縄ではいちばん大きい意味を持ってあったですね。⁽⁵⁾

沖縄独自の教科書作りは、裏返せば日本からの切り離しを図るものでもあったというわけである。

なお仲宗根の日記⁽⁶⁾には、本土でC I Eから文部省に提示された教科書検閲に関する文書(昭和21.2)が抜き書きされているし、米軍を通じて墨ぬり教科書も入手していたという。

昭和21年4月には、次のような「初等学校教科書編集方針」が示された。

コノ教科書ハ現下ノ情勢ニ鑑ミ初等教育ノ一日モ忽セニス可ラザルヲ思ヒ各学年ヲ通ジテ最低度ノ知識技能ヲ授ケルタメニ拙速ヲ顧ミズ編纂ヲ企テタノデアル從ツテ臨時ノ教科書ト見做スベキモノデアリ、近ク沖縄ニ関スル諸問題ノ解決ヲ待ツテ其ノ完全ヲ期シタイト思ツテキル。

編纂ニ当ツテハ特ニ左記ノ事項ニ留意シタ。

- 1 偏狭ナル思想ヲ去リ人類愛ニ燃エ新沖縄建設ニ邁進スル積極進取ノ気魄ト高遠ナル理想ヲ与ヘルコト
- 2 沖縄ノ向上ヲ図リ其ノ道徳、風習、歴史、地理、産業、経済、衛生、土木等ニ関スル教材ヲ多ク採リ以テ教育ノ基礎ヲ茲ニ置クコト。
- 3 東亜及ビ世界ノ事情ヲ知ラシメ特ニ米国ニ関スル理解ヲ深クスルコト。
- 4~6 (省略)
- 7 ローマ字ヲ採用スルト共ニ漢字ノ制限ヲ行イ以テ世界ノ情勢ニ適応スルコト。
- 8 高学年ニ於テ英語ヲ課シ将来ニ於ケル実生活ニ資スルコト。
- 9 当分ノ間教科書ハ、各学年ヲ通ジテ読方及ビ算数ヲ中心トシテ編集シ全教科ヲ網羅シ其ノ統合ヲ計リタルコト。
- 10 教材ハ全般ヲ通ジテ程度ヲ低クシ以テ、児童ノ学力及ビ体力ニ適応スルコトニ注意ヲ払ヒタルコト。⁽⁷⁾

こうして、すでに編集したもの、そして編集されつつあるものを含めて、沖縄版「ガリ版刷り教科書」の編集指針がまとめて示されたと言ってよかろう。

さらに、「編集方針の具体化」として、次の4点が示されている。

- A 出来るだけ程度を下げた文字語句の平易化を徹底せしめ教育内容に重きをおいた。
- B 科学的教材を努めて多く取り入れたがその充実完備は後日を待たなければならない。
- C 新教材はその大部分を沖縄関係に取材し沖縄の道(新沖縄の建設の精神)を体得せしめて沖縄建設の意気に燃えしめるように努めた。
- D 沖縄の道(新沖縄建設の精神)沖縄の歴史を貫いて一貫せる精神は船楫を以て津梁と為す発展精神である。四海を家と為し諸外国の長所を取り容れて自家葉籠のものとなし世界文化の昂揚に努めたのである。この発展包容精神を教材に具象化する様に努め徳育の名にかくれて長縮退嬰の民たらしめる様な教材は努めてさげ、明朗闊達にして実践力旺盛な性格を養う様にしたい。⁽⁸⁾

こうした基準に基づき、具体化を経て、沖縄版「ガリ版刷り教科書」は編集されたのである。つまり、「新沖縄建設」がこの時の合言葉であった。そのため、C「新教材はその大部分を沖縄関係に取材し沖縄の道(新沖縄の建設の精神)を体得せしめて沖縄建設の意気に燃えしめるように努めた。」のである。後述するが、確かに新教材は沖縄に取材しているし、この精神に培うものとなっている。しかし沖縄色を濃くし、日本色を薄くすることが、反面、沖縄の孤立を促進させる役割も担っていたことを忘れてはならない。沖縄を日本から引き離す——ここには、米国の対日・対沖縄戦後政策が滲み出ている。目に見える部分のありがたさを強調する反面、それによって失われる面に気づかせないやり方が、米国の常套手段であったのである。

それに特に国語科の場合の大事なこととして、「国語」という名称が、本土とは異なり許されなかった。「国」ということになると、それは日本と結びつけることになるからである。そこで「読み方」という呼称を使うことを強制されたのであった。

3 教科書編集過程・状況

①編纂過程

本土の暫定教科書の編纂は、実に複雑な過程・構造を採っていた。新教科書のみならず、現行教科書の英訳まで提出することが求められたからである。沖縄は、そこまでは行われなかった。むしろこれから使う教科書の編纂作業に専心することが求められていた。

それでは沖縄の場合、具体的にはどうだったのか。関係者の証言によれば、《1教材候補選定・実作—2英訳》(真玉谷)—3検閲(パス・ハンナ)—4可否の返

答》というようになっていたようである。つまり、編集委員が教材候補文を選定、あるいは実作し、それを真玉谷が英語に翻訳する。それをまず検閲官のパスが検討し、そして最終審査官のハンナが最終判断を下すという一連の構造になっていたのである。

②編集状況

毎日、朝方八時から夕方五時までが執務時間であり、これがアメリカ式で厳格に行われたようである。時間がなければ徹夜になってもやっつけてしまおうとする日本側編纂官に対して、勤務時間以上に働くことを戒めるアメリカ側との間で文化の差異を感じたという。

③編集資料（教科書）

編集に当たって最大の障害は資料であったという。まさしく灰燼に帰してしまった沖縄では、教科書を編集しようとしてもその参考となる教科書・資料が戦禍で失われてしまっていた。そこで、宜野座国民学校（師範附属）に疎開させてあった教科書や、あるいはハンナが上海・台湾・東京へ出かけた折りに参考になりそうな教科書を持ち帰り、それが教科書編集に大きな参考になったという。仲宗根は、その辺りのことを、質問に答えて、次のように述べている。

Q 当時、焼け残ったりした戦前の日本の教科書は、多少手に入ったんですか。

A いや、ほとんどなかったですね。ただ、宜野座の国民学校（現在宜野座高校）に沖縄師範男子部附属国民学校の教科書が疎開されていて、その一部だけがちょっと残っていました。（中略）

A 参考になる書物もないとは言うものの、少しずついつのまにか教科書編集所に集まって来て（中略）これは時代的にはちょっと先になりますけれど、本土から不適當な箇所を墨で消した従来の国家主義的・軍国主義的な教科書が入って来んです。

Q それはどういう形で入ってきたんですか。

A 軍がわれわれの所に持って来んです。われわれが参考にするものがないと、しょっちゅう言っていたもんですから。（中略）とにかく最初はまったくの無手勝流でした。⁽⁹⁾

二 「読み方」（国語）教科書の実態

1 資料（教科書）の残存状況

それでは、こうして編集された国語教科書の実態は、どのようなものであったのか。——と言っても、すでに当時から50年以上を経た現在、この問いに直ちに答えることは容易ではない。①年月の経過もさることながら、②何よりも混乱状況の中で「無手勝流」に編纂されたこと、③今日見ることができ実物が極めて少ない（ほとんどない）こと、④入手できた資料自体も発行年月

日がほとんどないこと、⑤中には学習者が鉛筆で書き写したものが入っている（薄くなって文字の判別ができない）こと、⑥改訂前の教科書が改訂版にそのまま流用されているものがある（ページの整合性を欠く）ことなど、教科書の実状を見極めることも困難だが、初版か再版かを決定しようとするこゝさえも、極めて厳しいと言わざるを得ない状況なのである。しかし、現時点で幾分か整理をしておかねば、将来はさらに状況が悪化するものと思われる。この貴重な歴史の事実を葬ってはならない。困難を乗り越え、子どもたちのために奮闘した人たちの渾身の営みの跡を残しておかなくてはならない。ここに、目次と出典を中心にした教科書の実態を資料として提示しようとする所以である。

この沖縄版「ガリ版刷り教科書」について現時点におけるもっとも信頼できる資料としては、琉球政府文教局編『琉球史料 第三集 教育編』（1958.7.14）を挙げることができよう。その中に、「初校一年——八年読方教科書教材」が所収されている。いくつか「史料不備省略」はありながらも、体系的に知り得る唯一の資料である。本史料の資料としての信憑性は、①何よりも琉球政府文教局という公的機関が編集したものであること、②編集・使用された当時からさほど時間を隔てていないこと（約10年）などから、ひとまず高いとして判断しておいてよからう。

次いで、この沖縄版「ガリ版刷り教科書」に関する注目される資料として、『激動の沖縄百年〈全6巻〉教科書復刻版』（1981年1月5日、月刊沖縄社）がある。この中には、『読み方一年』『読み方二年』『読み方六年（上）』『読み方八年』の四冊の国語教科書が復刻されている。これも実物を見ることができ格好の機会となった。が、『読み方二年』は『琉球史料』とは異なるし、『読み方六年（上）』は文部省編「みんないいこ」教科書（1947）の転載である。この異なる現象をどう解釈すればよいのか（一種類ではなかったのか）。

こうしたことからさらに「ガリ版刷り教科書」の実物を求めて調査を進めていくと、『琉球史料』に示されたものとは別の教科書が新たに発見されてくる。こうして「ガリ版刷り教科書」に複数の異本の存在、つまり何度か改訂された跡がうかがえるのである。ここは推測だが、おそらく緊急を要するものとしてまず全学年にわたって初版を編纂し、その後、情勢に応じて改訂版、あるいは三訂版と重ねていったのではないかと推測される。しかし、改訂版以降は必ずしも全学年で足並みを揃えて編纂されたかどうかはわからない。むしろ学年ごとにはばらばらであったのではないかと推測される。

と推究してみると、最も信頼に足ると判断した『琉

球史料 第三集 教育編』所収の「初校一年——八年読方教科書教材」は、いつ発行されたものだと判断すればよいのだろうか。またその前に、この八年分（ただし六年生は欠く）は、そもそも同時に発行されたセット（例えば初版）であったと判断してよいのだろうかという、もっと重い課題が頭を擡げてくる。さらに、この『琉球史料』でさえも「六年生」は欠けていたり、多くの箇所「史料不備省略」となっていたりして、その全貌をうかがうことはできない。こうした状況も合わせて推断すると、この『琉球史料』に収めるときにすでに資料は不足気味であったのではないかと思われる。となると、この『琉球史料』を編む時点でも、「ガリ版刷り教科書」がもはやセットとして存在していなかった可能性は高かったとも言えよう。⁽¹⁰⁾ つまり、これもまた推測だが、八年分を何とか集めようとして、とりあえず手元に集められたものを（場合によっては、発行年に関係なく、初版のものもあれば最新版もあるという風に。それでも六年生は欠けた）それぞれ各学年の代表として提示したとも考えられる。現実に筆者の調査でも、例えば三年生は、『琉球史料』所収のものより古いと想定される教科書が発見されている（後述）。『琉球史料』には出所が示されていないので、この点は断定できないが。

このように、現状において最も信頼に足る『琉球史料』でさえ、①各教科書の発行時期（初版等）の確定が困難であること、②また「資料不備省略」が多く見られ（六年生は丸一冊を欠く）、その補充が必要であることなど、課題は多い。これらの解決のためには、（すでに遅すぎる）今からでも可能な限り多くの実物調査を重ねるより他にない。

とは言っても、今後、新たに点数が増える可能性はあまりない。筆者も所持・所蔵の可能性のある機関・個人にこの約10年間（1993年～2001年）、何度か現地調査を繰り返したが新たな現物はほとんど見いだせていない状況である。それもそのはずで、編纂当事者の仲宗根でさえ「もう皆様方の手元には全然ありません。私自身が全然もっていないんで、たった一冊だけ初等学校の七年生の表紙だけありまして、その中に子どもが算数の計算をしているその一枚しか私は持っていません。そういうふうな状態でほとんど誰もっていないんでまぼろしになって消えてしまっておるのであります。私も早く消えてほしいと思っている」⁽¹¹⁾と述べている。米軍が使った用紙の裏を利用して印刷したともいうのだから、場合によっては綴じられていない形で発行された可能性も大きい。となれば、保存することなど、ますます覚束ない。やはり、もはや現在ではとっくに「幻の教科書」になってしまったのである

う。

そこで叙上のような状況から、不確かな部分を残しつつ、そしてそのことを重々承知しつつ、現時点において、筆者がこれまで直接入手（購入・複写・撮影・書写）、閲覧できた沖縄版「ガリ版刷り『読み方』（国語）教科書」（『琉球史料』も「復刻版」も含めて）の実態を、目次とその出典で示しておきたい。

2 入手・閲覧『読み方』教科書の実態

(1) 入手・閲覧『読み方』教科書の内訳とその所蔵機関

まず筆者が、現在、入手・閲覧できた『読み方』教科書とその所蔵機関を挙げておきたい。

◎『一年生』

- (1) 那覇市市民文化部
- (2) 『琉球史料』
- (3) 月刊沖縄社・復刻版
- (4) 那覇市市民文化部

◎『二年生』

- (1) 月刊沖縄社・復刻版
- (2) 那覇市市民文化部
- (3) 『琉球史料』

◎『三年生』

- (1) 『琉球史料』
- (2) 那覇市市民文化部
- (3) 那覇市市民文化部
- (4) 国立教育研究所附属図書館

◎『四年生』

- (1) 『琉球史料』
- (2) 国立教育研究所附属図書館

◎『五年生』

- (1) 『琉球史料』
- (2) 那覇市市民文化部

◎『六年生』

- (1) 那覇市市民文化部

◎『七年生』

- (1) 那覇市市民文化部
- (2) 『琉球史料』

◎『八年生』

- (1) 『琉球史料』
- (2) 月刊沖縄社・復刻版

(2) 各教科書の目次・出典等

それでは、学年ごとにその目次・出典等を見ていくことにする。

◎1年生

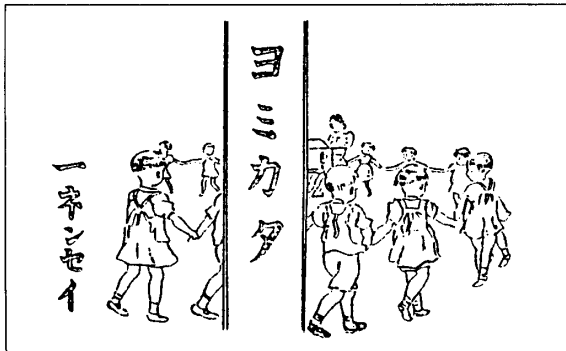
- (1) 『ヨミカタ 一年生』（那覇市市民文化部）
- (2) 『ヨミカタ 一年生』（『琉球史料』）

(3) 『ヨミカタ 一年生』(月刊沖繩社・復刻版)

(4) 『よみかた上 一ねんせい』(那覇市市民文化部)

この他、那覇市市民文化部の資料の中から、三ページばかり、これらのどれにも所属しないプリントが得られている。

(1)(2)(3)は、同一本である。いずれも全25頁。なお表中、()内は出典と考えられるもの。「⇐」は文章表現が同一のもの。「一」は文章表現が類似のもの。「☆」は沖縄関連の新教材。なお、一覧表の枠外に特記事項を注記する。以下同じ。

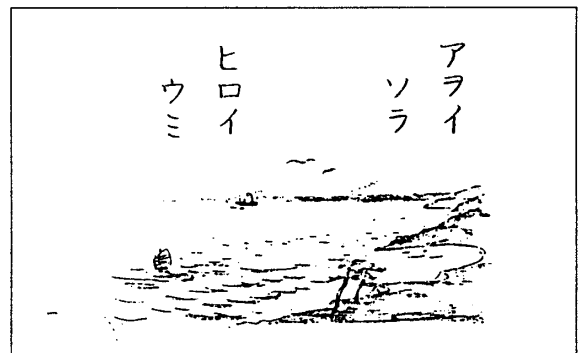


- 1 アライソラ ヒロイウミ (☆)
- 2 ハトコイコイ (⇐『ヨミカタ』1-2)
- 3 ハシレハシレ (⇐『ヨミカタ』1-7)
- 4 ココマデオイデ (⇐『ヨミカタ』1-8)
- 5 カミフウセン (⇐『ヨミカタ』1-9)
- 6 ユウヤケ コヤケ (⇐『ヨミカタ』1-12)
- 7 オツキサマ (⇐『ヨミカタ』1-13)
- 8 アイサツ (⇐『ヨミカタ』1-14)
- 9 ヒカウキ (⇐『ヨミカタ』1-18)
- 10 オツカヒ (⇐『ヨミカタ』1-19)
- 11 デンワゴッコ (⇐『ヨミカタ』1-20)
- 12 シリトリ (⇐『ヨミカタ』1-21)
- 13 カクレンボ (⇐『ヨミカタ』1-22)
- 14 アメガヤミマシタ (⇐『ヨミカタ』1-24)
- 15 ホタル (⇐『ヨミカタ』1-25)
- 16 ハコニハ (⇐『ヨミカタ』1-27)
- 17 アサガホ (⇐『ヨミカタ』1-29)
- 18 オハカノソウジ (一『ヨミカタ』1-30)
- 19 ハナツミ (⇐『ヨミカタ』1-31)
- 20 カタカナ図表
- 21 ユフダチ (⇐『ヨミカタ』1-32)
- 22 アリ (⇐『ヨミカタ』1-33)
- 23 メダカサン (⇐『ヨミカタ』1-35)
- 24 トビトカメ (⇐『ヨミカタ』1-36)
- 25 シタキリスズメ (⇐『ヨミカタ』1-37)
- 26 オ月サマ (⇐『ヨミカタ』1-38)

27 ウサギ (⇐『ヨミカタ』1-39)

18 沖縄に係深い花「ぶっそうげ」が出ている

巻頭の「アライソラ ヒロイウミ」だけが新教材であり、p.2以降は、すべて前期(第五期国定)教科書『ヨミカタ一』からの抜粋である。おそらく前期教科書からまず継承するものと中止するものとを振り分け、その際、本土と同様に超国家主義教材・軍国主義教材、それに沖縄固有の条件として日本教材を排除して、その残った教材で順次並べていくという編纂方法を採用したと思われる。こうした編纂方法は、本土の暫定教科書と同様であった。前期教科書は40教材あったので七割に縮小している。なお本土は二冊で一学年分であったが、沖縄はこの一冊だけであったと思われる。



「アライソラ ヒロイウミ」は、戦後沖縄の『読み方』教科書を象徴するキーワードとなったものである。巻一をどのように始めるかは、教科書編集者が最も熟考を重ねるところである。この時、編纂者の側では国民学校教科書巻一冒頭の「アカイ アカイ アサヒ アサヒ」を使おうとしていた。本土では、暫定教科書の冒頭に置かれた。が、沖縄では米軍によって「お前らは、日本が負けたということがわからないのか。アサヒは日本の象徴だろうが。」と、日本教材排除の視点から猛然と反対され、拒絶されたという。⁽¹²⁾

18「オハカノソウジ」には、花の名前(国民学校『ヨミカタ』では、「萩の花」)が沖縄独特の「ブッサウゲ」に置き換えられている。こんなところに沖縄版への配慮が働いていた。

この「アライソラ ヒロイウミ」を冒頭にした一年生用が一体いつまで使われたのであろうか。仲宗根の回想の中に、この冒頭は軍政部からも、また現場からも難しいという声が挙がったという。ならば早期に改訂されていても良いようなものだが、この改訂に関する仲宗根も含めた編纂者の具体的な言及(新教材に触れるなど)は存在しないし、それらしき現物も発見されていない。ただ大内義徳によれば、「ハトコイコイ」に改訂されたと述べている⁽¹³⁾が、その種の現物に筆者は残念ながら未だに接することができていない。

なお(1)~(3)と同列に属しながら、カタカナ図表(p. 13)アリ(p. 15—p. 19)、トビトカメ(p. 16—pp. 20—21)の3ページ分が、該当ページが異なっていると同時に、ページを示す場所・方法(下部に()で表示)も異なっているプリント(那覇市市民文化部所蔵)がある。細かなことではあるが、これも改訂版のあることの根拠として、今はこの異本の存在だけを示しておきたい。

もう一種、昭和22年度以降に改訂されたと考えられる異本が存在する。それが次の(4)である。

(4)『よみかた上 一ねんせい』(那覇市市民文化部)

- 1 はれたそら
- 2 あさひ
- 3 みんないいこ (⇨『こくご』1-1)
- 4 おかあさん
- 5 きいろいはな
- 6 ひこうき (⇨『ヨミカタ』1-18)
- 7 あさのうみ (⇨『1ねんせいのおながく』)
- 8 うさぎ (⇨『小学国語読本』3-3)
- 9 かくれんぼ (⇨『こくご』1-5)
- 10 こもりうた (⇨『ヨミカタ』2-10)
- 11 もちもの (⇨『こくご』1-6)
- 12 よみかき (⇨『こくご』1-7)
- 13 えんそく (⇨『ウタノホン上』4)
- 14 でんわあそび (⇨『ヨミカタ』1-20)
- 15 ゆうやけ (⇨『こくご』1-9)
- 16 あさのこくばん (⇨『こくご』1-8)
- 17 ゆうぎ (⇨『こくご』1-10)
- 18 にじ (⇨『ヨミカタ』1-10ソラガハレタ)
- 19 あいさつ (⇨『こくご』1-11)
- 20 はなつみ (⇨『ヨミカタ』1-31)
- 21 うさぎとかめ (⇨『ヨミカタ』2-3)
- 22 人のかお (⇨『こくご』1-12)
- 23 したきりすずめ (⇨『ヨミカタ』1-37)
- 24 手と足 (⇨『こくご』1-13)
- 25 ひとつのことばから (⇨『こくご』1-14)
- 26 なってみたいもの (⇨『こくご』1-15)
- 27 しゃぼんだま
- 28 だんだんくわしくなる (⇨『こくご』1-16)
- 29 せんせいの目 (⇨『こくご』1-17)

20 花の種類が異なる

21 日の丸の旗が欠如

「アライソラ ヒロイウミ」とは、大きく異なっている。その意味では異本であるとともに、改訂版である(再版か、それ以上かはわからない)。出典に示した『こくご一』は、第六期国定教科書であり、本土の昭和22年度用として、昭和22年3月15日に刊行されたも

のである。本教科書は、挿絵、語句、文章表現の酷似、また本文行数の一致などから、この教科書を参考にして編纂していることは間違いない。

なおこれに関連するものとして、「初等科第一学年生よみかた教科書について」(1948.1.14)という次の文書が出されている。

各年十二月発送致しました標記の件について左記事項おしらせ致します。

記

1 これまで一年生のよみかたの教科書は片仮名を採用してきましたが先般送付した教科書からひらがなに改めました。(中略)

1 今まで送付した一年生の教科書は前期後期通じ、各科毎に更に検討し全面的に改訂した上新版の教科書を本年度四月に間に合わせて送付する予定であります。尚改訂版の新教科書は平仮名で書写致します。⁽¹⁴⁾

この文書を受けて改訂されたのが(4)ではないかと思われる。本土に合わせて平仮名で始めるとともに、教材の多く(実に14/27、半数)が「みんないいこ」から取材されている。が、全編を「みんないいこ」と同一にしないで、半分も戦前の教材を残したのはなぜか。また、一年生の教科書なのに「こくご一」(前期用)だけから取材し、「こくご二」(後期用)から取材しなかったのはなぜなのか。あるいは、「こくご二」はまだ沖縄に届いていなかったからなのか。それとも、この時点でも、沖縄の自主性を出したかったのか。その辺りの事情・理由はわからない。

中に、国語教科書なのに音楽教科書からも取材されていることが注目される。これは、「初等学校教科書編集方針」に示された「教科書ハ、各学年ヲ通ジテ読方及ビ算数ヲ中心トシテ編集シ全教科ヲ網羅シ其ノ統合ヲ計リタルコト」を配慮したものかと思われる。この点は、他の学年も同様の措置が見られる。

◎二年生

二年生は、収集・閲覧した教科書から見る限り、少し偶然的なところがある。まず月刊沖縄社の復刻版『よみかた 二年生』から見てもよい。

(1)『よみかた 二年生』(月刊沖縄社、pp.1~8)

- 1 二年生 (⇨『ヨイコドモ』下-1)
- 2 ひこうき (⇨『国語読本』2-24)
- 3 鯉のぼり (⇨『よみかた』3-5)
- 4 あらしの日 (⇨『ヨイコドモ』下-9)
- 5 カミノ舟 (⇨『ヨイコドモ』下-5)
- 6 もえでるめ (☆)

(以下は目次のみ、本文は欠)

- 7 らくかさん (⇐『よみかた』3-2)
- 8 蛙 (⇐『よみかた』3-8)
- 9 をじさんとをばさん (←『ヨイコドモ』下-7)
- 10 ヤナギニ蛙 (⇐『ヨイコドモ』下-6)
- 11 ねずみのちゑ (⇐『よみかた』3-12)
- 12 むしば (⇐『よみかた』3-11)

9 ハワイ⇐マンシウ

この月刊沖縄社の復刻版は、全8ページしかない。ただし目次は上掲のように12課まであり、教材名とページ数とが記されている。これによれば、少なくとも17ページ以上あったことがわかる。

そして、おそらくこの教科書の後半を補ってくれるのが、(2)『二年生 ヨミカタ』(那覇市市民文化部)であろう(ただしページ数は若干異なる)。

(2)『二年生 ヨミカタ』(那覇市市民文化部) (pp.9~22)

- 1
- ↳
- 6 (以上欠)
- 7 らくかさん (←『よみかた』3-2)
ひらがな50音図
- 8 蛙 (⇐『よみかた』3-8)
- 9 をじさんとをばさん (←『ヨイコドモ』下-7)
- 10 ヤナギニ蛙 (⇐『ヨイコドモ』下-6)
- 11 ねずみのちゑ (⇐『よみかた』3-12)
- 12 むしば (⇐『よみかた』3-11)

奇しくもこの(2)は、(1)とセットを成すかのように、1~6が欠け、7以降が存在しているのである。しかも終わりが12課と一致している。仮にこれが二度に分けて配布されたと解するならば、本土の暫定教科書同様、分冊の形で発行されたと判断してよいのかもしれない。いずれにしても、(2)は(1)に連続したものと見て差し支えないと考えられる。

なお「6もえでるめ」は、嵐の後の植物の復興を描いたもの。戦災から立ち直る沖縄の姿にも重複する教材として出されたものである。

本教科書の特色としては、前期教科書から教材を抜粋している基本的姿勢は一年生用と同じだが、ここには修身教科書(『ヨイコドモ』)から取材されていることに驚かされる。と言うのも、本土では修身科が教科としては真っ先に停止され、その教科書の編纂は許されなかったからである。「守礼の邦」沖縄の特徴を残そうとしたのか、単に当時の価値観の反映なのか、その詳細はわからない。三年生以上の学年でも、この傾向は継承されている。

次に、『琉球史料』を見てみよう。

(3)『よみかた 二年生』(『琉球史料』)

- 1 しんにゆうせい
- 2 すずめ
- 3 ひこうき (←『釋国語読本』2-24)
- 4 こいのぼり (⇐『よみかた』3-5)
- 5 らくかさん (←『よみかた』3-2)
- 6 むしば (⇐『よみかた』3-11)
- 7 かみの舟 (⇐『ヨイコドモ』下-5)
- 8 かえる (⇐『よみかた』3-8)
- 9 つゆ (⇐『よみかた』3-15)
- 10 ねずみのちゑ (⇐『よみかた』3-12)
- 11 一寸ぼふし (⇐『よみかた』3-14)
- 12 砂の山
- 13 あらしの日 (⇐『ヨイコドモ』下-9)
- 14 とんぼのめだま
- 15 もえでるめ (☆)
- 16 花火 (⇐『よみかた』3-17)
- 17 きりぎりす (⇐『よみかた』3-19)
- 18 子馬 (⇐『よみかた』3-21)
- 19 うさぎとたぬき (⇐『よみかた』3-22)
- 20 自動車 (⇐『よみかた』3-23)
- 21 うらしま太郎 (⇐『よみかた』3-26)

15 南国的であり、「バナナ」、「パパイヤ」などが見えている。

この(3)『琉球史料』所収のものが、(1)(2)よりは新しいように思われる。

「文学校関係雑書類綴 1946年~1950年」(那覇市市民文化部所蔵)に、川崎初等学校での「教生地方実習日課表」がある。この資料から、昭和23年3月12日に「21うらしま太郎」を授業していることがわかる。この教科書の課数と一致しており、この当時、この(3)の教科書が実際に使用されていることがわかる。

◎三年生

三年生は、収集・閲覧した教科書から見る限り、さらに複雑である。まず、初期形態だと思われる『三年生 よみかた』(那覇市市民文化部、「教師用」と表紙に書き入れられている)を取り上げる。

(1)『三年生 よみかた』(那覇市市民文化部)

- 1 一つぶの米 (⇐『初等科修身』1-13)
- 2 夏の午後 (⇐『初等科国語』1-16)
- 3 日記 (←『初等科国語』1-17)
- 4 羽衣 (←『よみかた』4-25)
- 5 かひこ (⇐『初等科国語』1-7)
- 6 ふなつり (⇐『初等科国語』1-9)
- 7 蔡温 (☆)
- 8 子ども八百屋 (←『初等科国語』1-15)
- 9 種痘 (⇐『初等科修身』1-6)

- 10 月と雲 (⇨『初等科国語』1-21)
 11 つりばりの行くへ (←『初等科国語』1-24)
 12 船くらべ (☆)

4 のどかにかすむ春の海—空にほんのり富士の山

8 外国—出征 『初等科音楽』1-26

11 神様の扱い、固有名詞

12 本文欠

続けて『琉球史料』を見てみよう。

(2) 三年生 (『琉球史料』)

- 1 若葉の季節 (⇨『初等科国語』1-3)
 2 おたまじゃくし (⇨『初等科国語』1-5)
 3 かひこ (⇨『初等科国語』1-7)
 4 田植 (←『初等科国語』1-12)
 5 ふなつり (⇨『初等科国語』1-9)
 6 川をくだる (⇨『初等科国語』1-10)
 7 白あり
 8 蔡温 (☆)
 9 子供八百屋 (←『初等科国語』1-15)
 10 月と雲 (⇨『初等科国語』1-21)
 11 夏の午後 (⇨『初等科国語』1-16)

(以下資料不備—ママ)

4 手なみそろへて—み國のために

9 外国—出征、『初等科音楽』1-26

さらに続けて那覇市市民文化部、国立教育研究所附属図書館所蔵の教科書を取り上げる。なおこの二書の中身は同一である。ともに全65頁である。

(3) 『よみかた 三年生』(那覇市市民文化部)

(4) 『よみかた 三年生』(国立教育研究所附属図書館)

- 1 光は空から (←『初等科国語』1-3)
 2 おたまじゃくし (⇨『初等科国語』1-5)
 3 かひこ (⇨『初等科国語』1-7かひこ)
 4 田植 (←『初等科国語』1-12)
 5 ふなつり (⇨『初等科国語』1-9)
 6 川をくだる (⇨『初等科国語』1-10)
 7 白あり
 8 蔡温 (☆)
 9 子供八百屋 (←『初等科国語』1-15)
 10 月と雲 (⇨『初等科国語』1-21)
 11 夏の午後 (⇨『初等科国語』1-16)
 12 つりばりの行くへ (←『初等科国語』1-24)
 13 夏やすみ (⇨『初等科国語』1-19)
 14 日記 (←『初等科国語』1-17)
 15 稲刈 (←『初等科国語』2-2)
 16 山羊 (←『小学国語読本』6-7)
 17 船くらべ (☆)
 18 養老 (←『初等科国語』2-11)
 19 ぼくの望遠鏡 (⇨『初等科国語』2-12)

1 内題は「若葉の季節」、×天長節

4 手なみそろへて—み國のために

9 外国—出征、『初等科音楽』1-26

12 神様の扱い固有名詞

14 日記はあるが内容は新、沖縄に取材

15 挿絵は『小学国語読本』から。文章と絵が合わない。

16 部分修正あり

18 最終部分の「天皇」の話題を削除

この三年生は、こうして通覧してみただけでも複雑である。おそらく(1)がもつとも初期形態であろう。と言うのも、編集部と米軍との間で論争したという「羽衣」が存在するのはこの(1)だけだからである。その論争について、仲宗根は次のように述べている。

「羽衣伝説」を入れようとしたんです。ところが、それに、「美保」という日本の地名が出ているでしょう。アメリカさんは、それは日本の教材じゃないかとネジ込んできたんです。山城先生もそれを受けてですね、「沖縄にも羽衣の銘刈という地名があるから『美保の松原』を『銘刈の松原』にしたらどうか』と言われるんです(笑)。『先生、そんなことでもしたら後世の物笑いの種になりますよ。その点だけは絶対に譲ったらいけませんよ』と言ったんです。どうやらそれは「美保の松原」で通ったんですがね。そういうところにまで気を尖らせていたんです。⁽¹⁵⁾

「9種痘」の指導案(1947.1.31)が「文教学校関係雑書類綴 1946年～1950年」に残されている。これにより、昭和21年度後期にこの(1)が使用されていたことがわかる。

さらに、これまた「文教学校関係雑書類綴 1946年～1950年」の「教生地方実習日課表」(昭和23年3月12日)には、「15稲刈」「16山羊」を教材に授業していることが記されている。このことにより、昭和22年度後期には(3)(4)の教科書が使用されていたことになる。

となると、『琉球史料』所収の(2)は、その中間形態か、若しくは(1)よりもさらに古い形態ということになるが、先述した「羽衣」に関することから、ここでは中間形態説を取っておきたい。

なお「8蔡温」「17船くらべ」は、沖縄新教材である。こうして、各冊に1～2教材ずつ沖縄新教材を含めている。「蔡温」は、郷土沖縄を代表する大政治家である。その蔡温が子ども時分に勉強が出来なくて馬鹿にされていたのを一念発起して勉強に励み、ついに偉い学者・大臣になったという努力出世談となっている。「船くらべ」は、昔、朝鮮国で軍艦が必要になり、朝鮮の船と沖縄の船とを競争させてその優劣を比べたところ、沖縄船の方が速く丈夫であり、沖縄の造船技術が高く評価されたことを記した郷土教材である。

さらに「14日記」は、『初等科国語』1-17にも存在するが、沖縄風に書き改められている。所々にこうした

小さな配慮がうかがわれる。

◎四年生

四年生用として、2種の教科書を調査している。

まず『琉球史料』から、その目次を見てみよう。

(1) 四年生 (『琉球史料』)

(1～10 資料不備省略—ママ)

- 11 夕日 (⇨『初等科国語』3-22)
- 12 野口英世 (—『初等科修身』2-7)
- 13 マラッカへの船 (☆)
- 14 母の日 (⇨『初等科国語』4-22)
- 15 林の中 (⇨『初等科国語』4-9)
- 16 燕はどこへ行く (—『初等科国語』4-2)
- 17 振り時計 (⇨『初等科国語』4-20)

12 部分修正

16 一九三一年—昭和六年 (西暦に改められている)

1～10の教材を欠いているが、これが原初形態のようである。いずれも前期教科書から取材されている。なお「マラッカへの船」は、嵐に果敢に挑み、荒波を乗り切る沖縄の乗組員をマラッカ国王が賞賛するという沖縄人賛美の沖縄新教材である。

(2) 沖縄民政局文教部編集課編『よみかた 四年生』国立教育研究所附属図書館所蔵の目次は、次のようになっている。

- 1 とびの親子
- 2 夏 (—『初等科国語』3-15)
- 3 お月み (—『小学国語読本』7-23)
- 4 鳴子 (⇨『小学国語読本』7-24)
- 5 にげたらくだ (⇨『国語 第4学年上』7)
- 6 手ということば (⇨『国語 第4学年上』2)
- 7 いどうした友へ (☆)
- 8 きかい (⇨『初等科国語』3-10)
- 9 あひるの子 (⇨『国語 第4学年中』6)
- 10 川土手 (⇨『初等科国語』4-13)
- 11 ホノルルの一日 (—『小学国語読本』8-21)
- 12 作文 (—『国語 第4学年上』5)
- 13 安倍川の渡し (—『小学国語読本』7-21)
- 14 天気の話

2 軍隊・兵隊を部分削除 5連が4連に

3 パナナ—枝豆やくだもの

7 沖縄の地名 (万座毛) が出ている。

11 かなり手が入っている 沖縄⇨横浜

12 固有名詞に若干の修正

13 ほとんど同じ 冒頭部

この教科書は国定教科書の四期・五期・六期の三期から広く取材されている。特に第六期のいわゆる「みんないいこ」教科書から多く取材されているのが特徴的である。おまけに本教科書だけは珍しく「1947.10.20」という発行年月日が記されている。状況が落ちてきたことの現れか。なお、前述した「文教学校関

係雑書類綴 1946年～1950年」の「教生地方実習日課表」(昭和23年3月12日)には、「13安倍川の渡し」を教材に授業していることが記述されている。おそらく本教科書のことを指していると思われる。と、なると、昭和22年度後期の四年生用としては本教科書を使用していたものと思われる。

なお「よみかた教科書の取扱いについて」(1947.10.29、文教部長、各初等学校長宛)という公文書が、この時期に出されている。

初等科第4学年のよみかたの教科書を送付するにつきまして下記のことをお伝え致します。

1. 特に新仮名遣い(文教時報5月号参照)と制限漢字及び略字を採用してあります。
2. 新教材を多くし特に対話教材及び劇教材を従来より比較的余計に取り入れてあります。
3. 長文の教材または翻訳した教材もおりこんであります。(以下、省略)⁽¹⁶⁾

2「新教材について」は第六期『国語』からの採録を、同じく2「対話教材、劇教材」は「にげたらくだ」を、3「長文の教材または翻訳した教材」は、「あひるの子」をそれぞれ指していると思われる。

(1)が初期形態、(2)が改訂版かと思われる。

◎『五年生』以降、また全体的な総括等は、別の機会を得たい。

注

- (1) 沖縄県教育委員会編『沖縄の戦後教育史』、1977.3. p.9
- (2) 「米軍占領下の教育裏面史」、『新沖縄文学』44号、1980.3. 沖縄タイムス、pp.158～159
- (3) 1に同じ、p.8
- (4) 2に同じ、pp.156～157
- (5) 2に同じ、pp.184～185
- (6) 琉球大学所蔵
- (7) 1に同じ、p.443
- (8) 1に同じ、pp.443～444
- (9) 2に同じ、pp.161～163
- (10) 沖縄県公文書館に『沖縄県史』編纂の際の編集過程を知りうる会議録が残されている。そこにもこのガリ版刷り教科書の実物が少なく、を多く収集する必要性のあることが編集委員の間から要請されている。ガリ版刷り教科書(実物)の不足が想定される。
- (11) 1978.6.25、沖縄言語研究センターでの講演
- (12) 2に同じ、p.164
- (13) 「アメリカの対沖縄占領教育政策」、『沖縄文化研究』21、1995.2.28、法政大学沖縄文化研究所、p.363
- (14) 1に同じ、p.444
- (15) 2に同じ、p.165
- (16) 『琉球資料』第三集、p.262